

# 光の家

LIGHT HOUSE WITH THE BLIND

視覚障害者総合福祉施設  
東京光の家会報

130号

2004年11月15日発行

主のおきては完全であつて、  
魂を生きかえらせ、主のあかし  
は確かであつて、無学な者を賢  
くする。主のまじは正しくて、  
心を喜ばせ、主の戒めはまじり  
なくて、眼を明らかにする。主  
を恐れる道は清らかで、とこし  
えに絶えることがなく、主のま  
ばきは真実であつて、とこし  
く正しい。

詩篇 第一九篇七、九

巻頭言

## 再び福祉施設の役割について

理事長 田中亮治



東京光の家創立85周年記念 正秋バンドチャリティーコンサート  
愛のサウンドフェスティバル

撮影 深田 修哉

脱施設論、施設解体宣言あり。  
永年、福祉施設経営にあたって  
きた者であるが、これの真の意  
味は、いまだによくわからない  
いや、容易に理解できない、と  
言つた方がよい。

私どもの法人施設は、主とし  
て視覚障害者のための総合施設  
である。特徴としては、視覚障  
害の他に幾つかの障害を併せ持  
つ所謂「多重複障害者」が利用  
していることである。その福祉  
サービスの内容は授産作業、歩  
行訓練、生活訓練、点字学習、  
音楽活動等、かなり幅広い活動  
をしている。勿論、訓練だけで  
はない。障害の重い方には、昼  
夜わかたずに、きめこまかい介  
護・介助をしている。

現在、一〇歳代から、九〇歳  
代までの二二〇余の視覚障害者  
(その大方は重複障害者)が四  
つの種別の施設を利用している。  
日頃の福祉サービスの目指すと  
ころは自立支援であり、自立生

活の実現に向けてである。

日常生活上の基本動作（入浴・身辺処理動作・起床・就寝の一連の動作、屋内外の単独歩行訓練等）の訓練、生活環境確認のための諸訓練である。これらの訓練内容は、利用者個々の障害程度によって、一人ひとりみな違ってくる。

従って、現実の施設は自立に向けた訓練の場であると同時に生活の場でもある。だから、安心と安全と希望に満ちた生活の確保が大切なのである。当然、施設全体の生活を通して「生活には喜びを」が欠かせないものとなる。このように、自己実現となる生き甲斐あるサービスメニューを用意できるかが、各施設に要請されるのではないだろうか。

(2)

去る一月一日、岩手県北上市、北上市文化交流センター大ホール（さくらホール）において当法人施設利用者九名によって

結成されている「正秋ハンド・コンサート」が開催された。立ち見が出る程の満員（約一五〇〇名）

で、二時間余にわたる熱演で、感動と勇気のサウンドを提供することができ、万雷の拍手を頂いた。これが社会参加である。

利用者自らの足で立つての社会交流・利用者が最高に輝いた時間であった。福祉施設の存在理由は一つある。それは、利用者が障害の重荷、障害故の不自由さに負けずに、生き甲斐をもって輝いて生き、人間としての尊厳をもって倅せに生きる点にある。

もし、この事が出来ないならば「やっぱり施設はダメだ」ということになり、脱施設論、施設解体論が正しいということになるのではなからうか。しかし現時点で、脱施設論、施設解体論が「反施設」を意図したものであるなら、これはあまりにも現実を無視し、これまで果たしてきた歴史の実績を過小評価する暴論ではなからうか。私には

そう思えてならないのである。利用者の幸せは、在宅にもあり、地域生活にもあるが、施設生活にもある。幸せはいずれにもあり、どちらにあつて、どちらに無いというものではない。

(3)

この世に、天国的理想の生活があるだろうか。あるとしたらどこにあるだろうか。家庭にか、地域にか、あるいは施設にか、勿論、私か如き者に分かる筈がない。誰か知つておられるなら教えて頂きたいものである。ただ、私もは自らの力不足に心を痛めながらも、現実に施設に入所されている障害を持つ方々の生活と命を守るために日夜励んでいるところである。

ただ、つい先頃ある研修会でこんな事を教えられた。「どのような制度でも、制度自体が人を救うものではない。その制度にかかわる人いかにが利用者を救うのだ」と。施設の場合も同じではなからうか。

## 会報 五言

一、地震、台風、洪水等々による災害続出。まるで地球が怒り狂っているようだ。何に怒っているのだろうか。

一、天災か、人災か。何れであれ災害によって苦しむのは人間である。多分、地球も苦しんでいるかも。

一、わが法人施設の利用者・職員あげて、中越地震義援金を募り、贈らせて頂いたガンバツテクダサイ。

一、「共生」。幸せも不幸も、喜びも悲しみも、困難も共に分かち合う思想なり。喜ぶ者と共に喜び、悲しむ者と共に悲しむ。

一、福祉における自立：どんなに障害が重くとも、まず自分の足で立ち、一歩でも二歩でも自ら歩もうとする精神の涵養第一。第一、受けて感謝を忘れないこと。

# 安心して生活できる環境づくり

日本福祉大学 松原 唯

新生園の第一印象は、園生にとても活気がある、ということでした。これまで持っていた施設のイメージは、職員は人手不足で目の前の業務に追われ、利用者一人ひとりを見る余裕もなく、老人ホームばかり見ていたせいかもしれません、暗く閉ざされた感じの印象でした。

実習が始まる前、大学の授業で先生から、「自分が入りたいと思う施設、両親を入れても良いと思う施設はありますか?」という質問がありました。受講していた生徒は五百人程で、実際に福祉の現場で働いている人がほとんどでしたが、誰一人として手が上がりませんでした。私自身も、果たしてそんな施設が存在するのだろうかと思っていました。しかし実習を終えた今、同じ質問を受けたなら、大きく手を上げることができま

す。新生園は、他の施設とどこが違うのだろうか、実習の間中考えていました。他の施設をたくさん見てきた訳ではありませんので、比較をすることはできませんが、自分なりに分析してみました。

まず第一に、園生が安心して日常生活を送ることができるよう、きちんとした環境が作られていることです。一人ひとりに合わせた日課もそうですが、職員による施設生活での情報提供が、特に挙げられると思います。毎日朝礼の報告を行い、一日の流れ、職員の配置や動き等、施設内で起こっていることを知らせることによって、園生は何が起きているのかわからない状態ではなく、安心することができ、それが精神的な安定にもつながっていくのだと考えます。

第二に、一貫した指導を挙げ

ることができず、職員によって違ってしまわない様、訓練方法を統一してあることや、生活面では接し方や発言等の対応も適切にされていると思いました。それにはやはり、全職員が園生に対する同じ情報、同じ目標を共有すること、職員間のコミュニケーションが重要になってきます。昼食後や実習終了時に職員室を訪れると、いつも和やかな雰囲気があり、職員の方々も皆仲が良さそうで、お互いに協力し合っている様子がうかがえました。

第三に、外部との関わりが挙げられます。私のような実習生もそうだと思いますが、よく見学の方がいらしたり、近くの小学校との交流があることで、園生の意識が施設内にとどまるとなく、より広い世界を持つことができるのだと思います。又、運動会で外の施設を借りたり、コンサートに出掛けたり、旅行へ行ったり、バザーでお客様が

来ることも、外の世界を意識することにつながり、色々なことに興味を持つたり刺激を受けたりして、深みのある生活を送ることができるとわかりました。そして、職員の方との毎日の訓練もあります。とても地道なものです。職員の方の努力と工夫で楽しい雰囲気を作り、園生のやる気を盛り上げ、根気よく指導することでできることが少しずつ増えていき、園生も自信を持つことができます。自信を持つということは園生にとって、外では得難い貴重な経験であり、又、人間にとって重要なプロセスであると思います。

最後に、一ヶ月の実習を通して、光の家は神様の愛に包まれている、と感じました。障害があっても、人間らしく生きること、人として生きること、を最も大切に行っているのだと思います。 (今回は実習生に執筆して頂きました)

# 各施設のトピックス

## 身体障害者更生施設 光の家新生園

### 移動手段に着目した社会参加への取り組み

脱施設が声高に叫ばれている昨今ですが、本当に施設は不要なのでしょうか。施設は、その地域にあって、孤立無援の存在なのでしょう。私たちは、施設の役割を、盲重複障害者が地域へ出て行くための手段（白杖歩行・ガイドヘルパー）に求めてみました。



中学生に対して行ったガイドヘルパー講習

盲重複障害者がいざ地域（社会）へ出て行くことはそう容易

いことではありません。時として、わずか数十メートル先のお店に行くだけでも大変な事になるのです。新生園では、単に歩行訓練で白杖操作技術を指導するだけでなく、各セッションにて各人に応じた行動発達訓練（感覚訓練・体育訓練等）やコミュニケーション能力、金銭指導、マナー等を総合的に訓練しています。時間はかかりますが、訓練の積み重ねによって、盲重複障害者であっても単独で地域（社会）に出て行くことが出来るようになるのです。そして、それがどれだけ利用者の方たちの喜びになっているかと思うと、訓練を提供する私たちの励みにもなっています。

ガイドヘルパーを利用した移

動も、とても大切な移動手段の一つです。そのため、新生園では、地域の方々に対してガイドヘルパー講習やボランティア講習会を開いています。これらの講習においても、単に視覚障害者に対するガイドヘルプの技術を身につけるだけでは十分ではないと考え、盲重複障害者に重点を置いた内容の講習を行っております。また、実際の行事や訓練活動に参加していただく事で、より盲重複障害者を理解できるよう配慮しています。そして、

## 身体障害者授産施設 光の家栄光園

### 仕事を通じた地域との繋がり

栄光園では、入所・通所の利用者八〇名が、自分の持てる力を最大限に活かし、生き甲斐をもって日々作業に取り組んでいます。働いて賃金を得るといふ事は、それだけで社会参加の大きな一歩ですが、利用者にとつては、地域の方たちと繋がり

それが地域社会との繋がりとつながるよう取り組んでいます。

このような取り組みが在宅支援で可能となるのでしょうか。私たちはこれからも施設不要論を打ち負かす位の魅力ある施設で在りたいと思います。先日、近隣のファーストフード店からのご好意で、点字のメニューの提供を受けました。これも日々の積み重ねの成果であることと同時に、感謝の気持ちと地域へ浸透している喜びを感じました。（新生園指導課 日野 滋）

もつ大切な機会でもあります。

例えば、利用者が店員を勤めるお店、「ショップ・アカベ」は宅急便や写真の取次ぎ、市の指定ゴミ袋や中学校の上履き等の取り扱いも行っており、地域のお客様が来店されます。初めてのお客様は少し戸惑った顔をし





視覚障害者のお店 ショップ・アガベで...

ながらも、視覚障害者が利用しやすいような店内の様子に興味を示されます。打ち込まれた金額や合計額を音声で読み上げるレジスターや、商品に貼つてある点字の値段シール等です。また、商品の受け渡しを通して繋がりが生まれます。利用者にとつても地域の方と接する事は、とても新鮮であり、「元氣な子供が来たよ」、「犬に触らせてもらった」等、話題になることも多いです。顔見知りになつた方が街で声を掛けてくださること

も多く、地域との繋がりのきっかけづくりに「ショップ・アガベ」は大きな役割を担っています。また、点字印刷の仕事から多くさんの繋がりが生まれています。バリアフリー社会の暖かい風でしょうか、最近では視覚障害者の為に第三者が点字名刺を求めるケースが増えています。近隣の企業からの受注も増え、日本を代表する大企業からの相談もあつたり、利用者がその作業に携わる機会も多くなりました。

### 救護施設 光の家神愛園

## 衣料品買い物ツアー大成功！

神愛園では、地域社会とのふれあいを目的とした月一回の外出行事「ふれあいの日」を実施しています。通常は月に二、三回に分けて企画し、昼休み後より豊田駅前などに出かけ、買い物と喫茶を楽しむのが基本的なスタイルでした。しかし、春夏、冬に企画される衣料購入で近い場所では利用者も職員が徒歩で納品に行き、お客様に手渡しすることもあります。また、各団体のパンフレットや、企業の企画書などを点字にする仕事も増えています。

どんな作業でも、障害者が地域社会の一員として活躍できる場になると思えます。作業を通して社会との繋がりを深め、また利用者も職員も成長していければと考えています。

(栄光園授産課 室屋 安希)

は、園生の体型に合わせた様々な種類の服を購入する必要があり、また、月によっては他の行事との兼ね合いから、複数回の企画ができない場合などもあるため、全員一斉の買い物ツアーを企画することになりました。もちろん神愛園の園生の誰もがこのふれあいの日に参加できるわけではありませんが、それでも参加者全員一斉の外出ともなると、施設車両の利用は不可能なので、検討の結果、貸切バスで移動することになりました。しかし、貸切バスを利用するの買い物には駐車場や乗降場所の問題がありました。

買い物ツアーの場所については、これまで小規模の買い物では何度か利用したことがある南大沢の大型ショッピングセンターを希望していました。そこで思い切ってその大型ショッピングセンターに相談してみた



買い物後の一番(?) 楽しみなひととき

ころ、駐車場については、店舗裏手の商品の納品エリアを、そして店舗への移動についても店内への商品搬入口を利用することを快く提案していただくなど、非常に親切な対応を頂くことができました。

今回の買い物ツアーでは、出発時間を午前中にし、買い物と食事を楽しむことができるようにしました。「ふれあいの日」といえば、買い物よりもその後の喫茶を楽しむにする園生も多いのですが、今回は特に様々なレストランが揃い、食事、喫茶の面でも参加園生には大好評のようでした。

このように地域の方々のさまざまな協力を頂き、園生にとつては一大イベントであるふれあいの日は、新しいスタイルを加えることができました。これからも、年三回の衣料購入を中心に、このような形の買い物ツアーが企画されることでしょう。

(神愛園指導員 草間 樹)

## 海外研修

# 社会保障制度の充実とその課題

東京光の家では、毎年、職員を海外研修に派遣しています。

これは海外の福祉事情を学び、また異文化に触れることは、今後の福祉現場で働く上でとても有効であるとの田中理事長の意向により続けられ、近年、財政的に厳しくなっている民間施設では珍しいことです。そして、今回その任に選ばれたことは、とても幸運なことと感じています。さて今回、私の研修先はドイツ



マリエン広場新庁舎・カラクリ時計前にて(ミュンヘン)同行した神愛園 村上主任(右)とともに

ツとオーストリアで、両国の障害者施設、老人施設等を計六カ所訪問しました。両国の福祉を一言で言えば、高齢者・障害者のみならず国民全体に対する社会保障制度が充実している点です。障害福祉については、生まれた時点からサポート体制が整備され、様々なサービスを受けられる際もその費用の大半は公的に保障され(一部介護保険が適用)、自己負担額はほとんどないとの

ことでした。その他、失業者についても永続的に十分な保障が確保されており、ドイツでは、路上生活者もいますが、これは自ら選択してその生活を送っている人達で本当の意味

でのホームレスは存在しないとのことでした。その分、消費税等の国民の負担が大きい(消費税一六%)のですが、教育費・医療費は無料となっており、様々な面で社会保障制度が充実しています。

しかし、その反面、課題もありません。失業者については、保障が充実しすぎて、働く意欲の低下に繋がりが、高失業率(約一〇%)が続ぎ、また、財政面でも厳しい状況におかれ、その改善が急務の課題となっているそうです。

日本でも社会保障制度の改革が欧米の福祉先進国と呼ばれるようになっていきます。ただ各国の良い面だけでなく課題とする面を踏まえて、今後、日本が各国の模範になるような日本独自の社会保障制度を限られた財源の中で作り上げることが大切であると強く感じた今回の海外研修でした。(新生園訓練員 関口 仁朗)

## 専門性を高めるために

### 自閉症・てんかんの研修

我々施設職員は、その専門性を高めるために様々な研修会に参加します。盲重複障害者の方は視覚障害だけでなく、その他多くの障害を併せ持っています。今回は、「第二七回てんかん基礎講座」と「自閉症カンファレンスIN OROON」に参加し、勉強してきました。

「てんかん基礎講座」においては、医療やリハビリテーションについて第一線で活躍されている先生方の講演や、当事者の方からの訴えがありました。その中で、国立西新潟中央病院・臨床研究部長の亀山茂樹氏の講義における、「てんかんはその約八〇％は薬で制御されるが、難治性てんかんは外科手術による治療が増えてきている。われわれはてんかん専門医や脳神経外科専門医を核としたチーム医療を行い、最先端の検査機器と技術を用

駆使して、てんかんを見る・

切る・治す を実践している」

という話がとても印象的でした。

「自閉症カンファレンス」では

アメリカノースカロライナ州で

開発され世界的に普及・発展して

きた自閉症の人々への支援プ

ログラム「TEACCH」の基礎

や原理を学びました。そこでは

自閉症の人たちがわれわれの世

界に入ってくることは困難であ

る。自閉症の人たちの特性

（我々とのちがいは「自閉症の人

たちの文化」を正しく理解して

受け入れる。私たちが自閉症

の人たちの世界に入っていくこ

との大切さを改めて知ることが

出来ました。

私たちはこれらの勉強して得

た知識を仕事に生かすと共に、

更なる勉強をしていきたいと思

います。

（新学園訓練課主任 小倉実知彰）

自然の賜物を心の目で描く

## 「みつばちマーヤ」の刊行

このたび、虫・草花を描く生

物画家である熊田千佳慕先生

が、東京光の家創立八五周年を

記念して、「みつばちマーヤ」と

いう絵本を描いてくださいまし

た。これは、当法人の菅野秀郎

理事のご尽力によるものです。

熊田先生は今年九三歳、老眼

鏡もかけず、たぬきの毛三本の

筆で何カ月もかけて一枚の絵を

描きます。その絵は虫や草花の

姿を繊細に描き出し、フランス

の「ファール友の会」会長が

熊田先生からのお申し出によ

り、この絵本の収益金はすべて

障害を持つ人達のために役

立てられます。

発行（財）国際平和協会

定価 一〇〇〇円（送料別）

《お問い合わせ先》

東京光の家までご連絡下さい。

TEL〇四（五八）二三四〇

FAX〇四（五八）九五六八

# 東京光の家 創立八五周年記念

## 正秋バンドチャリティーコンサート

# 愛のサウンドフェスティバル



昨年の愛のサウンドフェスティバルは、正秋バンド結成一五周年を記念した音楽会を行い、正秋バンドの作曲したオリジナル曲や、田中理事長が正秋バンドのために心を込めて作詞した曲を発表しました。今年を引き続き、東京光の家創立八五周年を記念した音楽会を九月一日(土)に開催致しました。例年

愛のサウンドフェスティバルの日は不思議と雨が降ることが多いのですが、今回は気持ちのいい晴天に恵まれました。

会場のアミューたちかわ(立川市民会館)大ホールには、開演の二時間以上前からお客様が並び始め、ロビーには長蛇の列が出来ました。東京都内の救護施設をはじめ、福祉施設の利用

者や関係者の方も多数入場され、来賓には馬場弘融日野市長も越しくださり、会場は華やかな雰囲気になりました。

### - プログラム -

SHIAWASE

涙そうそう  
スタートライン  
愛が呼ぶほうへ  
童謡メドレー  
大空と大地の中で  
群青

アメイジング グレイス  
本日八晴天ナリ  
見上げてごらん夜の星を  
望郷じょんから  
津軽平野  
どんな花でも生きている  
皆ヒーローになるために  
今を生きて  
素敵な仲間われらナイン

司会もつすっかりお馴染みの女優高田敏江さんです。やさしく温かな声が会場に響き、いよいよ緞帳が上がります。眩しいばかりの照明と大音響、一気に会場は盛り上がり、舞台上正秋バンドのメンバー一人ひとりが輝きます。「涙そうそう」「愛が呼ぶほうへ」等の新曲も披露され、練習の成果が伺えます。今回は照明にも工夫が凝らされ、様々な色に変化する照明は曲に合わせて、舞台の印象を変えていきます。アンケートで最も人気の高い「群青」では、繊細なピアノの音色と力強い歌声で魅了



開場と同時に沢山のお客様が入場



八五周年記念のオープニングを飾る田中理事長の挨拶



し、アツという間に第一部が終了しました。

第二部の始まりは、正秋バンドが初めて挑戦した「ゴスペルソング・アメイジング・グレイス」です。休憩後、ざわついていた会場が、手拍子とメンバー一人ひとりのアカペラによる濃厚な雰囲気の中にシンと静まりかえ

ります。今回の音楽会の開催日である九月一日は、三年前に米国で同時多発テロが起こり、多くの方々が犠牲になった日でもあります。そこで世界平和を訴える意味も込めて「アメイジング・グレイス」や「本日八晴天ナリ」を選曲し、プログラムを工夫しました。



工夫が凝らされた舞台上で演奏するメンバー

われら素敵な仲間ナイン  
いついつまでも手を取り合って  
目の光は失ったけれど  
心の目は持ち続けたい  
上を仰いで神に祈ろう  
勇気の歌と感動を  
われらに音楽がある限り  
われらはくじけない前進できる  
Let's sing together!

神よ弱いわれらを強く強く支え  
給え  
雨の日も風の日にも嵐の日にも  
お支え下さい

おお神よ貴神の愛があれば  
われらはみんな生きていける  
神よわたしたちに  
愛を下さい  
すばらしい音楽を  
届けるために

Let's play  
together!

いつまでもどこま  
でも永遠に  
歌おう声高らかに

朗々と

その後、オリジナル  
曲の演奏と共に、田中  
理事長が作詞した「ど  
んな花でも生きてい  
る」が朗読で紹介され  
ました。今後、曲がつ  
けられる予定ですが、  
どんな曲に仕上がるの  
か今から楽しみみです。  
最後の曲は正秋バン  
ドの歌「素敵な仲間わ  
れらナイン」、昨年、田  
中理事長が作詞したオ  
リジナル曲です。長い  
曲ですが一部をご紹介します。



司会の高田敏江さんから、  
絵本「みつばちマーヤ」が紹介される



作業作品の他、CDや本の販売も  
大賑わい



「民謡のことなら何でも知っている」とご機嫌な正秋さん

コンサートは、簡単なですがセレモニーが行われ、財団法人日本失明予防協会にささやかですがチャリティーをさせていただきますました。これも皆様の善意によるものと感謝申し上げます。

今年のコンサートも会場いっぱいのお客様にお集まりいただき、盛会裡に終えることが出来ました。光の家が多の方々を支えられていることを強く感じることの出来る記念コンサートとなりました。

\* \* \*

奏びたい感動と湧きのサウンド  
Let's enjoy sound all together  
with Masaaki Band!  
God May bless us.  
God May bless you all!

この歌詞がまさに、正秋バンドとその奏でるサウンドを表しているように思います。

《会場の皆様からの声》

とにかくすばらしかったの一言につきまます。気持ちの中にどんどん入り込み、それがあふれんばかりの感動の渦となり、体

中を駆けめぐったような気がします。特に「群青」を聞いた時自然と涙がでてきてしまいました。音楽を聞いて涙を流すのはじめての体験でした。私は今点訳サークルでボランティアをしています。これからの大きな励みになったひとときでした。

(六〇代女性)

いつも思いますが、本当、正秋バンドって不思議な力を持っていますね。もっともっとたくさんの人にパワーを、正秋バンドを聞いてほしい。

(二〇代女性)

始めから終わりまで、真面目に真剣に取り組んでいるバンドの人達に、こちらの心まで洗われます。一〇年程前に二回続けてききました、その頃よりずっとずっとお上手になつたように思います。

(七〇代女性)



日本失明予防協会 小暮文雄理事長(右)にチャリティーを贈呈する

# 保護者が大張り切りの チャリティーバザー

東京光の家保護者会

田中フミニ

一〇月三日、一日中雨、本番にそなえて値付けの日。

ここにある物品は、皆さんがチャリティー精神で集められ、御寄附下さった貴重なものばかりです。価格の設定は、皆さんのご厚意が生かされる様に、なるべく良い値段をと考えながらも、一方では一〇〇円ストアなどを意識しながら決めて行かなければなりません。



今年も例によって実行委員長の山崎さんの明るくテキパキとしたリーダーシップのもと、皆張り切って作業いたしました。

一〇月一日、当日。天気予報は晴れ、しかし朝からしとしとと降り、気の揉める空模様でしたが、どうやら予定通り戸外で開催することが出来何よりなことでした。

私が初めて担当した仕出し物これは例年、売上増進の強い味方、朝の小雨のせいでお客さんの出足が懸念されましたが午後の晴れ間も幸いしてか、無事完売してひと安心。

お隣りの売場では保護者会の皆さんが、呼び込み声も高だかと回を重ねる毎に売り上手、勧め上手になって頼もしい。

今年はお家族連れが多い様に

見受けられました。

お父さんと連れ立った息子さんに「いらつしやーい!!」と声を張り上げて歓迎する売り子のお母さんの姿は堂に入ったもの。

何年間かのご無沙汰でしょうが昔の先生や、級友との再会本当に楽しそうな園生達。ボランティアさんと談笑する姿も又バザーの中での小さなドラマです。此の会場は単に物品を売買するだけでなく、こんな貴重な側面をも持つていることに、ひとしおの感慨をおぼえます。

バザーを通じて保護者同志の強い結び付きを感じると同時に

毎年の事ながら大勢のボランティアさん、地域の方がたの大きな力に支えられて、実りある成果を得たこと、これは来年に向かっての大切な道しるべです。

この熱気の中、バザーは無事フィナーレを迎えることが出来ました。

このバザーに関わって下さった皆様本当にご苦労様でした。

今回のバザーでは、延べ三八一件の提供品を頂き、三五〇万円を越える売上を上げることが出来ました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

## 寄付者名簿

平成一六年七月一六日  
一〇月一五日

西塚卓様	スイカ	六個	松田功様	米五六kg	梨八四個
鳥本みゆき様	ジャガイモ	九kg	鈴木富夫様	スイカ四個	醤油二本
溝上悦男様	マンドリン	一台	サラダ油	六本	みりん二本
長井成之様	梨	二二個	林重蔵様	ピーマン	四kg
山崎陽子様	梨	一〇〇個	市川久子様	枝豆	四kg
綾木潔様	梨	一六八個	イクリアントマト	三kg	大葉
菊池三枝子様	毛糸	九四個	茄子	五kg	空心菜
斎藤幸子様	すだち	八kg	木村尊様	相澤忠一様	を通じて
菅野節子様	点字図書	七巻	キリスト教関係書籍	一五冊	
菅戸満夫様	リポヒタンD	五〇〇本	ヤクルトスワローズ	投手	川島亮様
浅石常勝様	米	三〇〇kg	プロ野球ヤクルト戦五試合	計一五席	
			秋ハウジング恒産グループ様		
			水ようかん・コーヒ	各一箱	

## 新生園 二泊旅行

一〇月一九日から三日間、新生園は愛知県の伊良湖へ行ってきました。今年の旅行は海を体験する伊勢湾の旅です。初日は伊良湖フラワーパークで沢山の花に囲まれたあと、海を一望できる岬のホテルへ宿泊。順調な旅の始まりでした。二泊目は地引網、干物作り、フェリー乗船など企画満載。ところが今年は近年稀に見る台風の当たり年。



伊良湖フラワーパークにて花に触れる



ヤマハ楽器博物館にて音を楽しむ

超大型の台風二三号が直撃し、企画していた内容も残念ながら実施できませんでした。風雨が強まる中、ホテル内のボウリング場を借り切って、カラオケとボウリング大会を実施。大好きな音楽と運動で大いに盛り上がりました。最終日は台風一過の晴天の中、楽器博物館で沢山の楽器を体験。あいにくの予定変更となった二泊旅行でしたが、どこでも楽しんでしまう園生の明るさが印象に残る、忘れられない旅行となりました。

## 新生園 秋の大運動会

今年是非常に強い台風に見舞われた九月でしたが、新生園の運動会もその影響を受け、体育館での開催となってしまいました。しかし、参加者は保護者・ボランティアを含めて二二〇名を越え、楽しい一日となりました。また、毎年会場を提供してくださる東芝日野工場に感謝いたします。



デモンストレーション「新生樹」

## あとがき

涼しくなったとたん、続々と台風が日本列島をおそい、畑がすっかり水びたしになり、葉物野菜が高騰し、レタス一個が何倍もの高値になってしまった。洪水で家屋が流され、土砂くずれに合い大変な状況。

そんな最中に新潟中越地方に震度六の地震が発生し、家屋損壊、新幹線の脱線、飲料水不足、食糧もままならない報道しきり。しかし阪神大震災と違い行政の対応や救急処置がすみやかだったので、コンビニからおにぎりに水が届き、東京からも早速応援物資が届かれたとの事。罹災者の方々に心からのお見舞いを申し上げます。

大変遅くなりましたが、会報一三〇号をお届けいたします。

(N・T)

発行 千九一〇〇六五  
 東京都日野市旭が丘一七七一  
 社会福祉法人 東京光の家  
 電話 〇四二(五八)二三四〇  
 FAX 〇四二(五八)九五六八  
 編集責任者 田中のぞみ